



2025 年度
第 31 号

体育市民連帯 ニュースレター

1
冬季五輪を
6 ヶ月後に控え
ショートトラック
代表チームの監督交代



2
「キム・ヨナの夢」
は消えて…
虐待の悪夢
だけが残った



3
普段は学者
オリンピックの時は
メダリスト……
生活体育で大転換を



4
転校、沈黙、
校内暴力…
加害者と目された
高校エース



5
学校野球の
「オム・ソクデ」は
誰が作るのか



大韓民国スポーツの

根本的变化を

皆さんと共に

作って行きたいです

体育市民連帯と共に

していただけますか？



*

01 ニュース 1 2025. 08. 24

冬季五輪を 6 ヶ月後に控え、ショートトラック代表チームの監督交代



大韓スケート競技連盟が 2026 ミラノ・コルティナダンペッツォ冬季五輪の開幕を約 6 ヶ月後に控え、金ソンテ前中国代表監督を選任し、議論を呼んでいる。

スケート連盟は 20 日、第 3 回理事会を通じてショートトラックのユン・ジェミョン代表監督の補職変更を決め、金ソンテ連盟理事兼城南市庁監督を臨時総監督に選任した。

ユン監督は公金処理問題で連盟から 1 ヶ月資格停止を受けたが、大韓体育会再審で無嫌疑処分を受け監督職を継続維持すると予想された。しかし、理事会は選手団のずさんな管理と指導力の不在を理由に監督交代を決めた。

ところが、よりによって後任が金ソンテ監督だ。

連盟のある関係者は「雑音を甘受して下した決定だ。現在、代表チームを担当できる指導者の中で金ソンテ監督が最も良いと判断した」と説明した。

実際、金ソンテ監督は 2018 年平昌五輪当時、韓国代表チームを率いて金メダル 3 個、銀メダル 1 個、銅メダル 2 個を獲得した。2022 北京冬季五輪では、韓国のライバルである中国代表チームを務め、金メダル 2 個、銀メダル 1 個、銅メダル 1 個を獲得した。

さらに、国家代表チームと城南市庁などでチェ・ミンジョン、キム・ギリ（以上城南市庁）、ファン・デホン（江原道庁）など代表チームの主軸を指導した経験がある。

しかし、金ソンテ監督の選任について、スケート界では「公正でない人事」という声が出ている。

スケート界のある関係者は、「不当な人事手続きだ。ユン監督の更迭理由も明確でない。5 カ月前に連盟理事に選任された人がどうやって監督職を引き受けるのか」と主張した。

同時に金監督は先立って「選手団管理不十分」で 1 年重懲戒を受けた履歴があり論難をより一層大きくしている。

金監督は 2018 平昌大会当時、シム・ソクヒ（ソウル市庁）が暴行を受け、選手村を離脱すると、これを虚偽報告し隠蔽した。この事実が後になって知らされ、1 年資格停止という重懲戒を受けた。

また、2022 北京五輪当時、金ソンテ監督は中国の地元で韓国が偏向判定の被害に遭った時、沈黙で一貫してファンの激しい批判を受けた。2023 年には、金監督が城南市庁の指導者に公募すると、スケート指導者連盟が反対声明を出すなど、大きく反発した。

今回も議論があるが、連盟は金ソンテ監督体制で五輪に備えるものと見られる。

連盟規定によれば社会的物議で体育会関係団体で資格停止または出場停止 1 年以上の懲戒処分を受けた人は国家代表になれないと明示されているが、連盟側は「該当規定は『学校暴力、人権侵害』等で懲戒を受けた場合」として今回の選任に大きな問題がないという立場だ。

現在、ショートトラック代表チームは指導者2人とカナダに転地トレーニングに行っている状況だ。これに対し、金ソンテ監督はカナダに移動して選手たちと会うか、選手団が帰国した後、鎮川選手村から指導するか苦心しているという。

出典：<https://www.news1.kr/sports/general-sport/5887774>

02 sherlock 2025.08.25

「キム・ヨナの夢」は消えて… 虐待の悪夢だけが残った



「生きたかったです。」

コ・ヨンソさん（仮名、24）は淡々とした表情で話した。ヨンソさんの手はぶるぶる震えた。片手でもう一方の手を包んでも震えは止まらなかった。

7日、彼女の家でヨンソさんに会った。ヨンソさんは、金ヨナのような国家代表を夢見ていたフィギュアスケートの有望株だった。9歳で始めたフィギュアスケート。

しかし、彼女は太極マークをつけて世界の舞台を駆け巡るという夢を果たせず、20歳になった年に選手生活を終えた。

彼女にとって選手時代の記憶は長い悪夢として残っている。ヨンソさんは小学生の時の2011年から2016年まで、大邱スケート競技連盟所属のキム・アヨン（38）コーチから持続的な身体的・情緒的虐待を受けたと暴露した。

「よく眠れません。新しく処方された薬は一週間が過ぎるとまた効果がありません。薬の量を増やし続けているのに大変です」

虐待トラウマによって精神科治療を受けてからもう13年目だ。今もヨンソさんは寝ている途中、自分の手で首を絞め、悪夢を見る。自分の意志とは関係なく、突然虐待を受けたその時に戻る「フラッシュバック」症状のためだ。

5月のある日、目が覚めたら、部屋の中が血まみれになっていたこともある。しかし、ヨンソさんは、自分がいつ自害しようとしたのか覚えていなかった。

「憂鬱及び不安感、自殺事故及び自殺衝動に対する持続的な薬物治療が必要」

（2025.7.23. コ・ヨンソ心理評価報告書）

ヨンソさんは10年以上の歳月の間、トラウマの中でもがきながら生きてきた。それなら、加害者の金アヨンコーチはどんな歳月を送ったのだろうか。結論から言えば、彼女には「何も」起こらなかった。

韓国男子選手としては初めてジュニア世界選手権大会で2年連続メダルを獲得した国家代表選手を輩出し、指導力を認められて有名になった。2023年には大邱市長賞を受賞した。

「私は必死に頑張って（スケートを）しているのですが、（金アヨンコーチが）急に腹が立ったら呼んで殴ります。理由をつけるとしたら“ジャンプが成功できなかったから”でした」

暴行の理由は主に「指示通りに訓練を消化できない」ということだった。金アヨンコーチの拳や足がそのまま飛んできたり、スケート靴やナルジップなどであざができるほど殴られたりもしたと、ヨンソ氏は証言した。

ヨンソさんのような女の子たちの服を脱がせたりもした。理由は“ジャンプに失敗して”。他の選手たちが見る前で、上着を脱いでトレーニングを受けるように指示した。

最悪の事件は、13年のカナダ転地訓練で発生した。ヨンソさんの主張によると、キム・アヨンコーチは彼女をトイレに連れて行き、首を絞めた。そしてヨンソさんに言った。

「そのまま死ね。お前が死んだらお母さんに喘息で死んだと言えばいい」

ヨンソさんは喘息を患っていた。しかし、ヨンソ氏の主張によると、キムコーチが薬を制限したり、治療器（ネブライザー）の使用も防いだことがある。“精神力で勝ち抜かなければならない”という理由で。

ヨンソさんは、もう一度の衝撃的な瞬間について証言した。キム・アヨンコーチがヨンソさんの口の中にハサミを入れて「口を切る」と言ったという。その他にもトレーニングの途中、ヨンソさんのお腹を爪でつねって肉をむしり取ったこともある。虐待の被害者はヨンソさん一人ではなかった。

「今一番悔しいのは、当時私が若すぎて、何の対処もできなかったこと。また、よりによって CCTV のないトイレのようなところ、人が見ることのできないところで、主にそのような目にあったということです」

カナダ転地トレーニング以後、ヨンソさんはずっと悪夢を見た。寝ている途中、自分も知らないうちに自分の首を絞める症状もこの時から始まった。しかし、ヨンソさんは自分がやられたことを話すことができなかった。

「(キム・アヨンコーチが)『お母さんに言ったら、舌を切る、殺すぞ』と簡単に言いました」

結局、虐待トラウマで精神科の診療を受け始めた。母親のソン・ミヨン（仮名）氏も遅れて、転地トレーニングであったことを聞くことになった。しかし、ソンさんは「チームを移そう」という言葉をすぐには言えなかった。恐怖のためだった。

ヨンソさんが「テラトゥレット症候群」の症状が始まったのは9歳の時。体を自由に動かすことができないほどチック症状がひどかった。ヨンハダは医師と病院を訪れ、全国を訪れても快方に向かうことがなかった。

2010年はキム・ヨナ選手がバンクーバー冬季五輪で金メダルを獲得した年だった。その年の冬、ヨンソさんはふとフィギュアスケートを習いたいと言い出した。

「自分の体一つ支えられないのにフィギュアスケートが可能だったと思いますか？ それでも一度だけスケート場に行って、受け入れてくれなければ諦める気持ちで行きました」（母親のソン・ミヨンさん）

ソンさんは娘を連れて大邱のあるスケート場に向かった。その時紹介してもらったコーチがまさにキム・アヨンだった。

フィギュアスケートを習った後、チック症状が目立ってよくなり始めた。母親のソンさんは「奇跡を味わった」と当時を回想した。ヨンソさんの自尊心も徐々に回復した。趣味クラスから「選手クラス」に移った。数年後には全国大会2位という成績を収めたりもした。

「ヨンソはスケート場に第一歩を踏み出すその瞬間が好きでスケートをすると言いました。ゆっくり滑走すれば、すべての心配事が消えると言って、本当に喜んでいました」（母親のソン・ミヨンさん）

フィギュアスケートをやめるわけにはいかなかった。しかし、虐待を受けながら、引き続き金コーチの指導を受けるのも耐え難いことだった。他のコーチのチームに移ろうとしたが、思い通りにならなかった。

「親交のあるコーチ同士は互いに選手をやりとりしない」という理解できない不文律(?)に阻まれた。

「私はひどい母でした。 ヨンソが好きなようにスケートをできないと、再びチック症状がひどくなるのではないかと心配で、再びキム・アヨンコーチを訪ねました」(母親のソン・ミヨンさん)

時間は流れて 2016 年 2 月。キム・アヨンコーチチーム選手の両親の間に過去の転地訓練当時の虐待「疑惑」が水面上に上がってきた。 ソン氏も自分が知っている虐待状況を他の親たちに伝えた。するとキムコーチから「退出」の通知が来た。

「キム・アヨンコーチは私がヨンソの嘘を何でも話して立場が苦しくなったと言いました。 ヨンソを嘘つき、妄想症患者扱いしました」(母親のソン・ミヨンさん)

ソン・ミヨンさんは侮辱感を感じた。 金アヨンコーチに会って問い詰めた。 キムコーチは具体的な虐待事実は認めなかったが、対話の最後にこのように答えた。

「事実。ヨンソが言ったことは事実です」(2016. 2. 29. キム・アヨンコーチ-ソン・ミヨン対話録取録)

ソン氏は金コーチを訴えるつもりだった。 しかし、今回も「フィギュアスケートを続けなければならない」という考えが足を引っ張った。 今度は他のコーチのチームに移ることができた。 しかし、「金コーチを告訴すれば、新しいチームにも受け入れられない」という条件の前で告訴を諦めるしかなかった。

母娘の前に置かれた選択肢は 2 つだけだった。 選手生活をやるか、沈黙して耐えるか。

「キム・アヨンコーチは私にいつでも死ぬように言いました。 それで私は死ななければならないと思いました。 そして私は 2016 年からずっと妄想に陥った嘘つきにならなければなりませんでした。」

ヨンソさんのチック症状は好転と悪化を繰り返した。 フィギュアスケート選手生活もこれ以上続けられなかった。 9 歳の時から抱いてきた太極マークの夢もそこで止まった。

20 歳のヨンソさんの心の中には、空虚さと無力感、そして消えない傷だけが残った。 役立たずになったようだった。 眠れない夜が続いた。 忘れようとすればするほど鮮明になる虐待のトラウマと、何の責任も負わない大人たちに対する恨みで心が崩れていった。

ねじれにねじれた自身の人生を正すには結局「その日」に戻らなければならないと考えた。 ヨンソさんは、自分が経験したすべてのことを暴露することにした。

「私は死のうとして(金コーチを)告訴したのではなく、生きたいと思って真実を言っただけです。 あの時は怖くて言えなかったことを、今は勇気を出して言いたいです。 どうか助けてください」

昨年 12 月、ヨンソさんはキムコーチを児童虐待などの疑いで告訴した。 大邱スケート競技連盟に懲戒要求書も提出した。 沈黙を破るのに 13 年かかった。 児童虐待処罰法第 34 条によると、児童虐待犯罪の公訴時効は被害児童が成人になった日から始まる。

告訴後の 2 月、ヨンソさんはキム・アヨンコーチと会った。 大邱スケート競技連盟の金サンユン会長が作った席だった。 ヨンソさんは、「金コーチが虐待の事実を認め、心からの謝罪をしようと思った。」

「(金コーチが) 私に『死なないでほしい』と言って、『コーチとして育ててやる』という話ばかりするんですが、それは認めることでも謝罪でもないじゃないですか」

キム・アヨンコーチは弁護士を通じて「裏面合意書」作成を提案したりもした。 虐待事実を認める趣旨の合意書を書く代わりに、警察には「民・刑事上の責任を問わないことにした」という簡単な内容だけが書かれたまた別の合意書を作って提出するという話だった。

「謝罪ではなく(虐待の事実を)全部認めてさえいればよかったでしょう。 ところが謝罪も認めずに裏面合意書を話したのです。 私は最後まで戦うつもりです。」

大邱スケート競技連盟の金サンユン会長は、責任よりも懐柔に汲々とした態度を示した。金会長は金コーチとヨンソさん親子を呼び集めた席で、「会長（自分）はヨンソの味方だ」、「ひざまずいて『みてくれる？』と（お願い）する考えをしてきた」などと話した。さらに、ヨンソさんに「（私を）会長パパと呼べ」という言葉も言った。

「とても鳥肌が立ちました。私の肩に手を置きながら「会長パパ」と呼んでほしいと……。」

ヨンソさん母娘とのインタビューは4時間近く続いた。母親のソン・ミヨン氏の車に乗ってスケート場に向かった。車内にはヨンソさんなしで二人きりだった。ソンさんがため息をつくように静かに話した。娘を守れなかったという罪悪感は何にも消せない。

「私は共犯でした。ヨンソが私を児童虐待で告訴しても何も言えません…。今もフィギュアスケートをさせる親たちと連絡がついたら必ず言います。子どもたちに気を使ってほしい」（母親のソン・ミヨンさん）

ヨンソさんの「お父さん」を自任した大邱スケート競技連盟会長。その後、彼はどのような役割を果たしたのだろうか。大邱スケート競技連盟は、キム・アヨンコーチに対する懲戒手続きを8ヵ月間保留している。18日、大邱スケート競技連盟関係者は「（告訴事件）判決が下されれば懲戒手続きが進行される予定」と明らかにした。

同日、記者と電話で話した大邱スケート競技連盟のキム・サンユン会長は「（葛藤解決は）法で自分たちだけで判断すれば良い」とし、懲戒問題に対しては「告訴（事件判決）結果が出てこそ懲戒するのではないかと反問した。なお、ヨンソ氏に本人を「会長パパ」と呼べと言った理由については「よくしてあげようとしたこと」と説明した。

大邱市体育会も「最終判決が出れば対応する」という立場は同じだった。大韓氷上競技連盟も「大邱スケート競技連盟とスポーツ公正委員会の判断を待っている状況」と説明した。

現在、児童虐待告訴事件は大邱寿城警察署で捜査中だ。ヨンソさんと一緒に訓練を受けた別の虐待被害者たちが書いた事実確認書と嘆願書も警察に提出された。

4月3日、大邱家庭裁判所はキム・アヨンコーチに臨時措置を決めた。2ヵ月間、大邱児童保護専門機関に相談と教育を委託するという内容。臨時措置は、児童保護事件の円滑な環境調査・心理及び被害児童の保護が必要であると認めるときに下される措置である。

キムコーチの立場を尋ねるために18日から何度も電話をかけたが、つながらなかった。携帯メールで質問を送り、インタビューを要請したが、やはり答えはなかった。22日、キムコーチの住所地に2度訪れたが、会うことはできなかった。その日、キムコーチは携帯メールで、「出産後回復中で非常に敏感な時期にある」と反論インタビューに応じないという立場を明らかにした。

出典：<https://www.neosherlock.com/archives/35584>

03 ソウル新聞 2025-08-20

普段は学者、オリンピックの時はメダリスト……

生活体育で大転換を[87年体制「大韓民国」以外すべてを改めよう]



大韓民国体育は当初、6・25 戦争後の体制宣伝のための道具として集中育成された。体育政策の根である「国民体育振興法」は 1962 年 9 月制定当時、その目的が「体育を通じた国威宣揚」にあることを明確にした。

昨年、史上初の 1000 万観客時代を開き、「国民スポーツ」の地位を固めたプロ野球も 1982 年、第 5 共和国の政治的目的によってスタートした。1979 年 12 月 12 日、軍事反乱を起こして政権を握った新軍部は、混乱した民心を早く鎮めるために、国民の視線を政治ではなく他のところに向けなければならず、大衆の愛が熱かった高校野球に注目した。

このような背景で大衆化された各体育種目は、国民の余暇と健全な趣味活動のための場というよりは、成果を出さなければならない戦場のようであり、結果を出すための過程は無視されるのが常だった。選手個人の人権はもちろん、国際大会に出る代表選抜過程、種目別協会行政などで「公正」のような概念はエリート体育で尊重されない場合も少なくなかった。

民主化以後、次第に時代が変化し、エリート体育に向けた社会認識も少しずつ変わり始めた。過去の五輪で銀メダルや銅メダルを取ったにもかかわらず、罪人になった表彰台で頭を下げて国民に謝罪した先輩たちとは違って、勝者を祝い、与えられた結果をありのまま受け入れる選手たちが続々と登場した。

体育界の外部ではエリート有望株の学習権強化の動きが起きた。2010 年、国家人権委員会は成果至上主義的エリート体育の弊害を指摘し「スポーツ人権ガイドライン」を制定し、韓国体育政策の根本的な大転換を促した。人権委はガイドラインを▲憲章▲暴力予防▲性暴力予防▲学習権保護など計 4 部門で構成し「国家レベルで体系的なスポーツ人権政策が用意されなければならない」と強調した。

政界は 2021 年にスポーツ基本法を制定し、国家主義的エリート中心政策から国民皆の「生活体育時代」に大転換を宣言したが、依然としてスローガンに終わっているという指摘だ。

国務総理を委員長として 2023 年 12 月に発足した国家スポーツ政策委員会は発足当時、1 次会議以後、今までただの一度も開かれていない。政府は、エリート体育と生活体育政策の統合コントロールタワーとして国家スポーツ政策委を発足させたが、政府と対立していた当時の李ギフン会長体制の大韓体育会は、不参加を宣言し、「中途半端」にした。体育界の代表団体がいない政策委は、1 年後の昨年 12 月、第 2 回会議を開催する計画だったが、尹錫悦（当時）大統領の非常戒厳宣言で霧散し、その後事実上、植物委員会に転落した。

生活体育実務を執行する大韓体育会の関連予算と組織も縮小された。文化体育観光部は李会長体制体育会の放漫・不透明な予算執行を指摘し、今年の体育会予算で昨年対比 1388 億ウォン削減した 2951 億ウォンを配分した。生活体育振興予算は昨年 1357 億ウォンから今年 514 億ウォンに 62%減少した。生活体育部・

青少年体育部・スポーツクラブ部の3部署で構成された体育会生活体育本部組織は予算縮小により学校生活体育部とスポーツクラブ部の2部署に縮小された。

専門家らは、政策設計の段階で既存のエリート体育と生活体育を対立的要素と見る二分法的見解から破るべきだと強調する。ソウル大学体育教育科のチョン・ヒョンウ教授は「今まで私たちの体育政策は生活体育を支援すればエリート体育は支援が減り成果を害する恐れがあるという見解が広がり、10年以上政策が空転している」とし「エリートと生活体育統合政策のためには体育人中心の現政策委に教育と保健、福祉専門家まで参加幅を拡大しなければならない」と指摘した。

幼年期から多様なスポーツに簡単に接することができる米国や欧州、日本などでは珍しいが、生活体育に基づいた選手がオリンピックをはじめ、国際大会でメダルを獲得する事例もある。2020 東京五輪に続き、2024 パリ五輪でも金メダルを獲得した米国女子フェンシング（フルーレ）選手のリー・キーパーは、ケンタッキー大学医学部に在学中だ。神経外科専門医の父親について、6歳の時にフェンシングを趣味で始めた。

東京五輪の女子サイクルロードレースで金メダルを獲得したアナキゼンホーファーの「本業」は数学者だ。オーストリアのウィーン工科大学で数学を専攻し、スペインのカタルーニャ工科大学で博士号を取った後、スイスのローザンヌ連邦工科大学で研究員として働きながら、五輪の準備をした。

2018年4月、世界最高権威マラソン大会である米ボストンマラソンでは、日本の埼玉県で高校事務職として勤務していた川内優希が2時間15分58秒の記録で男子の部優勝を果たした。アジア人が同大会で優勝したのは、01年の李ボンジュ以来初めてのことだった。川内は高校時代まで陸上を専門にしていたが、負傷で早くから夢をあきらめ、マラソン同好会で走り続けた。

出典：<https://www.seoul.co.kr/news/plan/system-renovate/2025/08/21/20250821008001>

04 ハンギョレ 21 2025-08-14

転校、沈黙、校内暴力…加害者と目された高校エース



「子供たちの間では王様です。…誰も 何とも 言えません。」

2025年7月、忠清南道天安市のあるカフェで会った高校3年生のチョン・ヒョンス君（18、仮名）は、天安北一高校野球部でA君にやられた「苦しみ」と「いじめ」を説明する途中、虚しい笑みを浮かべた。チョン君は2023年2月、高校入

学前の冬の転地訓練からいじめられ、入学直後から毎年監督・コーチなど学校の大人たちに助けを求めた。しかし、「野球界の巨人たち」である学校の大人たちは、これを「些細な口論」と見なした。結局、我慢できなかったチョン君の父親が2025年5月、A君を校内暴力（以下、校内暴力）の加害者として通報した。元有名野球選手の息子でもあるA君は、全国区のエースと評価される選手だ。2025年9月17日に開かれる2026韓国プロ野球（KB0）新人ドラフトで1位候補に挙げられる、北一高野球部の顔だ。

弁護人団を構成し、学校暴力の通報に対抗した「A君の父親」

高校1年生の時も通報しようとしたことがある。当時は野球部長（野球部担当教師）の仲裁で、A君の両親が謝罪する線で終わった。25年5月の学校暴力処理過程の雰囲気は違った。A君は法務法人を雇用し

て弁護団の助力を受けた。A君がむしろチョン君を校内暴力の加害者として申告する一方、秀麗な文章が
いっぱい野球部内外の嘆願書も数十枚確保して提出した。

父親と二人きりで校内暴力の審議に対応したチョン君が涙を流しながらこの間のいじめを告発し、友人10
人余りが「A君のいじめは事実」「A君の申告は偽り」と嘆願書を書いてくれたが、教育庁の判断は違っ
た。7月10日「証拠が不十分だ」として「校内暴力ではない」決定を下した。忠清南道天安教育支援庁
が作成した「学校暴力対策審議委員会決定通知書」によれば、審議委員会は2023～2024年にA君のチョン
君に向けた△言語暴力(豚の鳥×、×神のような鳥×など)△各種お使い△いじめ(同僚・後輩たちに「あの
子と話すな」「1年生にイメージ洗濯する」「無視しろ」等の発言)を認める証拠が不十分だと判断した。
チョン君は「校内暴力ではない」結果については「どうせこうなることは分かっていた」と淡々と話し
た。2023年3月、校内野球部長にA君のいじめを初めて通報した時も、2024年1月の日本冬転地訓練途
中、チャ・イルモク野球部コーチに泣きながら駆けつけた時も反応は似ていた。2023年には「あなたにも
誤りがあるじゃないか」と言われ、2024年には「和解しなければ試合に出さない」という警告に和解しな
ければならなかったという。「私は警察署に早く行きたいです。」チョン君は捜査機関の助けを求めた。
2025年8月14日、チョン君の父親は警察署を訪ね、A君を侮辱・名誉毀損・セクハラ疑惑で告訴する手続き
を踏み始めた。A君の「いじめ」で息子が不安と憂鬱障害の診断まで受けたのに、学校暴力委員会で「学
校暴力ではない」処分を受けたので、他の選択肢がないという考えだ。「ここまで来くなかった」こ
の2年半を振り返って、父はこう言った。「この学校で野球を続けなければならないから」埋めておこう
とした事実まで、今はすべて取り出して「真実を明らかにしたい」と言う。

「シャワー写真を無理やり撮って 友達に見せて」

ハンギョレ21の取材に応じた父親は、学校暴力委員会には申告しなかった被害事実まで出した。「ここ
まで話さなくても十分にいじめ被害を認められ再発防止対策が用意されるだろう」と信じていた純真さを
後悔すると話した。チョン君も取材陣に会って、校内暴力対策委員会でどうしても明らかにできず、心の
中に隠しておいた深い話を持ち出した。

チョン君とA君は2023年2月、北一高校入学を控えて開かれた巨済島冬季転地訓練で初めて会った。最
初は親しかったが、A君がチョン君を相手に過度な要求をし、問題が浮上し始めた。最初は洗濯や食事の
手伝いから始まった。『おやつを持ってこい』『洗濯しろ』のような雑用から、ご飯を食べる時も注文番
号が出ると、本人は座っていて私に……。チョン君は言葉を濁した。

葛藤は浴室でシャワーを浴びるチョン君の裸体をA君が携帯電話で撮影しながら爆発した。訓練期間には
携帯電話搬入が禁止されたが、A君がこっそりと携帯電話を持ってきた。チョン君は「使い走りを断る頃
だった。(浴室に入って)ドアを閉めて洗っていたら、箸で(ドアを)取って入ってきてびっくりした。
ドアノブにある穴に鉄の箸を入れて回して(入って)写真も撮り、映像も撮った」と当時の状況を説明し
た。それと共に『おい×これ見ろ』と言いながら、自分が撮ったものを自慢するように見せたりもし
た」と主張した。

「3回以上」の裸の撮影が続くと、チョン君はかろうじてA君の携帯電話を確保し、自分の裸の映像と写
真を削除した。チョン君は「機種まで正確に覚えている。トム・ブラウンケースのアイフォン11プロ灰
色だった。これだけ消すように頼んだ」と話した。チョン君は当時、映像と写真を見た4人の実名を挙
論して「恥ずかしくもあったが、他の子供たちが見ると恥ずかしくてだめだと思った。できるだけ早く携

帯電話を奪いたかった。Aが私より背が高くてどうにか奪おうと手を伸ばしても難しく、Aが携帯電話を使わないタイミングで奪って削除した」と振り返った。

最初は止めた父親「ずっと運動しなければならないから」

チョン君は携帯電話の裸の写真を削除する頃から「Aの悪口が始まった」と主張する。チョン君は「巨済島訓練に行ってきた子供たちの前で悪口を言い始めた」と打ち明けた。2023年3月、チョン君は入学するやいなや被害を訴えたが、父親が申告を阻んだ。「1年生だったじゃないですか。未来のために雑音を作りたいありませんでした」父親は当時は校内相談を通じて解決する問題だと判断した。

チョン君の考えは違った。「最初、父に野球部長ではなく、教育庁に直接行こうと言った。理由は、(悪口といじめ)話をしても(措置が)できないことが明らかだったからだ。私が3ヵ月間経験したので、このシステムを、いや野球部長を通さないようにしようと言った」野球部の学生は野球部長を通じてのみ相談申請ができた。

事件に接した野球部長は、A君とチョン君を呼んで供述書を書かせた。ひとまずチョン君は悪口やお使いなど被害事実だけを書いた。これをきっかけに、A君の父親とチョン君の父親が直接通話することになる。「いつも人間性が重要だと言っていましたが、息子を間違えて育てた私の過ちです。もう少し私が気を使って、今後はそのようなことがないようにします」2023年5月23日、A君の父親はチョン君の母親に謝罪の意味が込められたメールを送った。チョン君は心的苦痛で2023年4月から7月まで野球部訓練に参加しなかった。

チョン君と父親は、「A君の裸の撮影事実をハンギョレ21に初めて公開する」と話した。チョン君と彼の両親は、なぜ2年半が経ってからこの事案を外部に明らかにしたのだろうか。チョン君は「父親が『話すな』と言った」と話した。チョン君の父親は「その時は息子が1年生を始めて1ヶ月が少し過ぎた状況だった。2年生、3年生の間、ずっと運動もしなければならなかった」とし、「必要なことだけ話して、事を大きくしたくなかった。それで息子に話すなと言った」と口を開いた。続けて「(浴室撮影が)問題になれば息子を転校させたり野球部から出て行けと言われるので、より一層慎重にならざるを得なかった」と付け加えた。

転校した後輩「言ったことない、無駄だとわかってるから」

被害を主張するのはチョン君だけではない。A君の1年後輩のクォン・ジェヨン君(17、仮名)は「いつからいじめられたのか」というハンギョレ21の質問に2024年1月、北一高の日本冬季転地訓練当時であったことを思い出した。「そのこと」があつて4ヶ月後の5月、クォン君は結局野球を辞めて転校した。クォン君は、A君が自分に向かって「身近ないじめをさせる」というのが耐えられなかったと告白した。クォン君もチョン君のように野球部内で問題が解決されないと思った。「監督またはコーチにこの事実を知らせたのか」という質問に「話したことはない。どうせ言っても無駄だということを知っていた」と静かに語った。

そのようなクォン君は2025年5月、チョン君がA君を校内暴力で通報する時に参加した。A君からいじめられた契機と関連内容を詳細に盛り込んだ陳述書を学校暴力委員会に提出した。陳述書には「先輩のせいで学校で話す友達もいませんでした。友達も私を避けました。持続的な悪口といじめによって持ちこたえるのがとても大変でした」と書かれている。

クォン君がA君のターゲットになった理由は、チョン君を助けたからだ。野球部のチャ・イルモクコーチが子供たちを集めて公開的に「証人」を探し出し、その過程でクォン君がチョン君を助けたという事実が

露出したということだ。「(チョン君がA君に被害を知らせた) 翌日、チャコーチが1年生を全員集めた席で「(A君が後輩たちにチョン君の悪口を言ったという事実を) チョン・ヒヨンスに知らせた人が誰なのか手を上げろ」と話し、イム・ユンソン(17、仮名)が手を上げた。その後、A君から激しい悪口を聞いていじめが始まった」と主張した。

チョン君は「2023年に野球部長に被害事実を知らせた後から、Aが『チョン・ヒヨンスは何でも告げ口するから話を交えるな』とし、同期と後輩まで懐柔した」として「この時から子供たちが私を避けて話も交わさなかった。私と一緒に通う後輩に対しては「あいつ×と付きあうな」「あいつ無視しろ」と言って切り離れた」と主張した。チョン君は「子供たちが避けてダッグアウトで一人での時間が多かった。一人で下校しなければならなかった」と付け加えた。

クォン君は「Aが××××と言って『あなたも(チョン・ヒヨンスと)同じようにしてやろうか』と言った」とし「(事件後)後ろで『あいつ無視しろ』と言いながら私の挨拶を受け入れてくれなかった。運動場を整理する時、2人が一緒に一度に終わらせることを私一人で2回行ったり来たりさせることが多かった」と打ち明けた。彼は「先輩たちが近づいてこなかった」として「野球もうまくいかず大変な状況だったが、仲間外れにされると感じて結局野球を辞めた」と話した。

一時、証拠収集したイム君の父親「介入したくない」

イム・ユンソン君が受けたやり方も似ていた。A君は2024年1月、日本の冬の転地訓練期間に後輩のクォン君とイム君がいる部屋を訪ねてきて2時間近く暴言を吐き、野球場と宿舎を行き来する道のバスの中で隣の席にイム君を座らせて悪口を言った。クォン君は「宿舎でイム・ユンソンと同じ部屋を使ったが、毎晩イム・ユンソンが『Aのせいで大変だ。韓国に帰ったら野球をやめたい。大変だ』と話したとして「Aがイム・ユンソンを座らせ、『××』は当然で、『生ゴミより劣る×』等、非常に激しい悪口をたくさん言った。その度にイム・ユンソンは頭を下げて「申し訳ない」と答えた」と話した。

帰ってきても状況が良くならないと、イム君は両親に「腕が痛い」と言ってリハビリを要求したり「転校したい」と話した。これを不思議に思ったイム君の父親はクォン君、チョン君に数回電話して息子と関連したいじめ状況を把握し証拠を収集し始めた。精神科診療で否定的な結果を受け入れると、イム君の父親はA君の両親とチャコーチなどに電話し、「次もこのようなことが発生したら黙っていない」と警告した。クォン君は「イム・ユンソンの父親から何度も電話がかかってきた。(校内暴力の)通報をすれば証言できるかどうかを尋ねる連絡が何度か来た。「うちの子がいじめられて精神病院を行ったり来たりする」と言っていた」と打ち明けた。イム君の父親はハンギョレ21が連絡すると「(校内暴力事件に)介入、関係したくない」とし「役に立てず申し訳ない」と話した。

チャコーチはハンギョレ21に会って「コーチが自分とイム君の身元を露出させた」というクォン君の主張に反論した。彼は「(学生たちが)団体で集まった状況で(2人の学生の身分を)露出させたのではなく、その場で『起きていないこと、確実でないことを誰にもむやみに話してはならない』と話した」と強調した。続けて「A君とチョン君と一緒にいる席でチョン君の口を通じてクォン君とイム君の名前が出てきた」と主張した。「チョン君とA君を和解させる過程でクォン君とイム君の名前が出てくる必要があるのか」という問いには「そうは思わない。この事案を正確に調べるためには、(A君の悪口を知らせた者が)誰なのかを知る必要があった」と答えた。

「イム君の被害事実も認知したのか」という質問にチャコーチは「1年生の末(2024年)ごろ(イム君の父親が)転校すると言って、イム君が病院に通っていた時だった。イム君が「メンタルが揺れる」と言っ

て、後で知ったのが、A君とそのようなことがあってメンタル的にとっても大変だ、それで心理相談を受けたと聞いている」と答えた。彼は続いて「イム君の父親から電話を受けた。この時「お父様に確認してみなければならないのではないか」と話した。ところが（父親が）いつも話していたのが、絶対にこれ（いじめ）を問題視しないと聞いた」と付け加えた。

野球部相談専担だが、記録さえ残していない野球部長

ハンファグループ財団傘下の天安北一高校は、野球名門として定評がある。鳳凰大旗、青龍旗、黄金獅子旗など主要全国大会で数回優勝した履歴がある。全国単位の自律型私立高校なので、野球有望株が寮生活を甘受してでも入学するところだ。野球部は24時間一緒に過ごし、休みの時も一緒に練習する。

有名プロ野球スターたちの産室である北一高校だが、野球部の校内暴力事件を処理する過程は繊細ではなかった。北一高校のキム・オクソン校長はハンギョレ21に会い「野球部と学校間の疎通は随時になされる」と言ったが、チョン君の校内暴力事件だけを処理しただけでイム君のいじめ被害と関連してはこの間どんな報告も受けることができなかったと話した。北一高校の野球部長は2023年、チョン君がA君のいじめを申告した内容を当時校長に報告しなかった。キム校長は「1年生当時には野球部長が呼んで訓戒し諭す程度で終わられる事案と判断し、当時学校長に伝達されなかったようだ」と話した。野球部の報告マニュアルは別にないことが確認された。

校内相談専担の先生が別にいるが、野球部は利用しない。相談は野球部長に一本化されている。チョン君は「朝の朝の朝会時間を除いては担任の先生に会うことがない。相談室があることはある。しかし、行く気が全くない。学期初めに担任の先生の相談があるが、野球部はしない」と話した。

問題は相談権限を与えられた野球部長が相談内容の一切を記録に残していないという点だ。野球部長はハンギョレ21と会って「子供たちが訪ねてくる場合があり、電話もたくさんする」としながらも「(記録として)残しておくことはない」と話した。「チョン君が2023年に初めて正式相談要請をした時、これを記録として残したのか」という問いに「分からない。確認する必要がある」と述べ、回答を避けた。チョン君は2023年に野球部長に初めていじめを吐露した時「野球部長の指示で私は陳述書2枚を、A君は1枚を作成した」と話した。校内暴力専担調査官はチョン君、A君との面談を通じて2023年に二人の学生が野球部長に陳述書を提出した状況を認知したが、陳述書を確保することはなかった。野球部長にも陳述書の提出を要求しなかった。

「これほど飛び火するとは思わなかった」…… 穴のあいた対応システム

校内暴力の通報受付後、加害者-被害者間の分離もなされなかった。監督とコーチ陣が校内暴力を通報した後、関係者たちと一緒に呼んで数回にわたって対話を交わした。これに対してキム校長は「校内の校内暴力マニュアル上、絶対にそうしてはならない」としながらも「保護者の立場では子供たち同士が分裂した状況なので、監督とコーチが乗り出して仲裁する役割をしなければならないという話があった」と釈明した。チョン君とA君を分離しなかった背景を尋ねると、「チョン君の父親がチョン君とA君の両方を野球部から分離してほしいと要求した。前例がなく教育庁に問い合わせてみると「そのような事例はない」と返事を受け要求を受け入れなかった」と答えた。

野球部の頂点にいるイ・サンゲン監督はハンギョレ21と会って一連の事態を「些細な口論」と言った。

「本当に少しでも何かあったら、私やコーチに来て話してほしいと言います。でも、こんなことはありませんでした。認知できなかったんです。お互いに和解し、仲良くしていると思ってここまで来たのです」彼はため息をついて言った。チャコーチも「このように問題になると少し戸惑う」と加勢した。

学校の反応も変わらなかった。キム校長は「学校では生徒たちの間で交わされた内容や単語から見て深刻に見ておらず、単純に友人間で運動する過程で生じうる問題だと見た。それで野球部長と監督もその程度の線で解決したが、今になってこんなに大きな問題に飛び火するとは当時は知らなかった」と話した。その一方で「この事案は学校暴力委員会で『学校暴力ではない』と判断した」と強調した。ただ、キム校長は「大韓民国の運動部が非常に閉鎖的で、ある問題を提起した時、野球側では『ほとんど埋蔵されるしかない』という認識を学生と両親ともに持っているようだ」と話した。

A君に向けたコーチと卒業生の視線は微妙に交錯する。チャ・イルモクコーチは、「(父親が)有名人で野球人なので、他の人から見ると、より多くの恩恵を受けていると思うが、むしろそうではなかった。もっと気をつけた」と話した。しかし、北一高校の卒業生Nさんは「監督が特別に可愛がっているというのか？特に選手たちに気を使う方ではないが、A君にはそのような姿が見えた」と話した。

チョン君、クォン君は野球部内で、「A君の影響力と地位が特別だ」と口をそろえる。チョン君は「A君を中心にほとんどすべてが回る」と話した。一方、ハンギョレ21に会ったある保護者は「A君と仲良くしている友達が多い。校内暴力ではないと判明した事案をなぜ取材するのか」と不満を吐露した。

A君の父親「イメージを傷つけたいようだ」

A君の父親はハンギョレ21と会って被害者の主張に反論する前に「そのように子供を育てなかった」と断言した。彼は学校暴力対策委員会が開かれた後、3ヶ月間の時間について「死ぬほど苦しかった。私が有名人だからこのように息子が被害を受けなければならないのか」と口を開いた。そして彼は「重要な時期に何とか息子のイメージに傷をつけたがっているようだ」と話した。A君の母親もやはり「記事が出てくると自体だけで息子は深刻な打撃を受ける」と話した。

A君の父親は、浴室での撮影など被害者らの主張について、事実確認や意見を聞く言葉には、法務法人を通じて答えた。この法務法人は「学校暴力委員会と徹底した関連者などの調査を通じて『学校暴力ではない』とすでに最終結論が出た。審議委員会の決定に異議があるならば行政審判などの適法な不服手続きを通じて進行しなければならない」とし、「それでもこれを無視して虚偽事実を流布したり疑惑を提起する方法などで2次加害をするならば、これに対する強力な法的対応などに出るだろう」と答えた。

この法務法人は続けて「A君は野球が好きで立派な選手になるのが夢の平凡な学生選手だ。

出典：https://h21.hani.co.kr/arti/society/society_general/57858.html

05 ハンギョレ21 2025-08-14

学校野球の「オム・ソクデ」は誰が作るのか

(訳注：李文烈の小説を映画化した「私たちの歪んだ英雄」は、ある田舎の小学校で起きたオム・ソクデという暴力的人物の横暴を通じて、独裁と民主化、そして変節に対する政治的比喻を盛り込んだ)



場面一

コーチは選手たちを集合させた。一人の選手を前に立たせて他の選手に聞く。「お前たち、この子と一緒に運動を続けられるか？」集団いじめにあった選手が学校を相手に問題を提起するや起きたことだ。コーチは「仲裁」しようとしたという言い訳をした。

場面 2

選手の保護者が他の保護者の電話を受けた。「今チームが解体されることになったので、色々な人に迷惑をかけずにチームから出て行ってほしいです」チームで暴力と集団いじめにあった選手が学校を相手に問題を提起するや校長がチーム解体に言及した後に起きたことだ。

場面 3

加害者の調査に突然学校長が同席した。「熱心な若者です。ずいぶん前のことでもあり、私が厳しく叱ったので大目に見てあげなければならないのではないのでしょうか？」加害者の疑惑は学生時代に後輩の下着まで剥がして恥ずかしい行為を強要した恐ろしい性暴行だった。加害者は当時一緒に笑ったとし「いたずら」と言った。

指導者から選手に転じた加害当事者

この3つの場面は、国家人権委員会に勤めていた時に直接接した事件の一部だ。言及された被害者は皆、早くから運動をやめた。加害者は残り、被害者が去ることになる体育界の不合理な慣行は被害者の沈黙を強要する抑圧構造を作ってきた。「なぜ被害がある時にすぐ言わなかったのか？」という言葉も学校管理者や指導者たちからよく聞くことになるが、体育界が被害を受ける度にすぐに話せる環境だったとすれば、今日の「スポーツ人権」という用語自体もなかったかもしれない。

最近スポーツ倫理センターに受け付けられた事件を見れば、過去の指導者が行った人権侵害が選手と選手間の関係に移る様相が明確だ。人権感受性が多少向上するにつれ指導者たちが変化してはいるが、同僚選手同士が長い時間一緒に過ごす閉鎖的な訓練文化は全く改善されなかったためだ。問題は同級生であっても、試合で占める割合によってチーム内の地位が大きく変わるという点で発生する。これはすなわち選手間の序列化につながり、上命下服、暴力、不合理な統制など人権侵害を生む。長い時間一緒に過ごさざるを得ない運動部生活の一日一日が地獄のようなこともありうるという話だ。

このような問題は運動部内の民主性を害することはもちろん、不当な秩序と規律に力を加える。力のある選手による暴力を伴う統制と強圧が蔓延するようになり、見苦しい他の選手を除け者にすることを指示したり、味方に立った同調者の庇護の下で(性)暴力はすなわち「いたずら」に化けるものだ。このような権力関係は、生徒の間だけにとどまるのではなく、父兄の序列関係にも知らず知らずのうちに影響を及ぼす。いわゆる「上手な」選手の得をする学校管理者も、指導者も、選手もそして保護者まで同調し、あえて「触れることのできない存在」を作り出す。

イ・ムンヨルの小説「私たちの歪んだ英雄」には学校で君臨する級長「オム・ソクデ」が登場する。オム・ソクデは先生が見るに模範的で学業成績も優れた学生だったが、その裏には他の学生たちに対する暴力と強圧、そして権力を土台にした君臨が位置していた。そのようなオム・ソクデに対抗することは学校という生態系の「秩序」を揺るがすことと考えられ、それを疑ったり正すよりは権力への順応を通じて「騒がしくないように」することがすなわち「賢明な」行動と見なされた。外部の目で見なければ問題が起こることさえなかったこのような問題は、体育界にも蔓延している。

誰かの私益のために'避けられない'とされた犠牲

体育界で起きている人権問題の原因が閉鎖性にあるという指摘は、昨日今日の事ではない。体育人たちの「現場」には「特殊性」という名前で彼らだけの秩序が存在し、この秩序は人権領域では通用しにくい基準と原則が土台を成している。このようなことが外部に知られたら困るという一種の同質感も閉鎖性を高めるもう一つの原因だ。もしこれが不当だと考えても、これを外部に知らせることはできない。その結果が自分にどのような不利益で戻ってくるのか、これまで目で見て話で伝え聞いて体の中で深く体得されているためだ。

加害者は残り、被害者が去らなければならない苛酷な環境は、それが「賢明な」行動という暗黙的な同調の中で被害者の沈黙を引き出してしまふ。小説の主人公ハン・ビョンテがオム・ソクデを最後まで告発できず、遠い後日悲惨な状態のオム・ソクデに向き合っただけで悔恨の涙を流したようにだ。決して解決できないように見えたこの問題は、遠い将来、後悔と悔恨で涙を流すことになっても、胸の中にしまって生きていくしかない。

このようなスポーツ界の閉鎖的な構造は、勝利至上主義という結果主義的思考と認識の中で芽生える。国家支援で生きていく韓国スポーツは競技成果を土台に支援金増やすことに没頭する一方、その裏面に隠された不条理や人権侵害は進学と就職、大きくは「国威宣揚」という大義の前に、または誰かの私益の前に「避けられない」と包装されたまま犠牲につながる。法と道徳のきわどい境界で法的処罰を避けることができれば、その不可避な犠牲は起きなければならない。このような慣行の中で成長した選手たちが社会的物議をかもした後、該当事件に対する謝罪と反省をするより「競技力で報いる」という突拍子もないことを言う。「スポーツ=結果」という教えを学んだ通りに話すことだ。

高校野球で現れる同僚間いじめ事件は小説の中の「オム・ソクデ」が現実に現れたようだ。多数が徒党を成して力のない一人をいじめるのではなく「隠すことができない存在」その一人が多数を苦しめる。小説と同じようにチーム内でこれを告発する勇気はいわゆる「秩序」を揺るがすことなので、大多数が沈黙と同調を選択する。絶え間ない2次加害の中で被害者はより一層萎縮し「オム・ソクデ」はより一層堂々となっている。

有望株の悲惨な言葉に見えないのか

しかし、我々は記憶しなければならない。多数が共犯である彼らの言葉と行動は、結局野球全体を蝕むということを使う。これまで我々は、野球界で小説の中のオム・ソクデのように悲惨な末路を迎える選手を何度も見てきた。学生時代に有望だったが、全盛期になって学生時代の校内暴力はもちろん、飲酒運転、暴力、賭博など、こましゃくれた人性と行動で自ら崩れ落ちた姿をいう。その度に野球ファンが「実力以前に人性」という、選手の本質こそ野球を愛するようにする必須条件であることを必ず確認させてくれたという事実もまた記憶しなければならない。

出典：https://h21.hani.co.kr/arti/society/society_general/57835.html

体育市民連帯オンライン 定期後援案内

万人が楽しむスポーツ世界、体育市民連帯が共に作ります。
私達連帯の活動に積極的に賛同していただくことを願います。

私たち体育市民連帯は体育人の権益保護と
福祉実現のために努力しています。
皆さんの小さな心づかいがより良い世界のための
体育市民連帯活動に強固な土台となります。
体育市民連帯会員として力になろうと
される方は下の口座に後援お願いします。

国民銀行 086601-04-095940

口座名義：体育市民連帯

オンライン定期後援は下のリンクを通じてホームページからできます。

多くの関心をお願いします。

体育市民連帯 ソウル市 瑞草区 瑞草洞 孝寧路 230 スンジョンビル 407 号

Tel : 02-2279-8999、E-mail : sports-cm@hanmail.net ホームページ : <http://www.sportscm.org/>

日本語訳：佐藤好行 新日本スポーツ連盟 国際活動局 韓国担当 jr1fep@gmail.com

週刊ニュースレターバックナンバー（資料室） <http://www.yg.jpn.org/sportscm/index.html>